

	電	子	展	示	会
		余	録		

「史料にみる日本の近代—開国から講和まで100年の軌跡—」

本年7月20日から、電子展示会「史料にみる日本の近代—開国から講和まで100年の軌跡—」(<http://www.ndl.go.jp/modern/>)を当館ホームページの「ギャラリー」のコーナーで提供している。

これまで当館では、所蔵史料に加えて各方面から拝借した史料に基づく「議会政治展示会」を、帝国議会が開設されて70年目に当たる昭和35年から、開設110年目の平成12年まで、10年ごとに開催してきた。今回の展示会では、これまでの展示会に出陳した史料のうち代表的なものを中心に紹介したが、その大部分は当館憲政資料室所管の史料である。

憲政資料室は、昭和24年の開設以来、近現代の日本の政治史に関わる一次史料(政治家、官僚、軍人等が所蔵していた手紙、日記、原稿、メモ、書類等)を収集し、整理したものを順次公開することに努めてきたが、その淵源は戦前の事業にまで遡る。

明治憲法制定50年を記念した憲政史編纂事業の一環として、昭和12年衆議院に「憲政史編纂会」(尾佐竹猛委員長)、翌年貴族院に「貴族院五十年史編纂掛」(同前)が各々設置され、明治期の元勲をはじめとする政治家や、議会が所蔵していた膨大な史料を写本により順次収集した。この事業は戦争により中断を余儀なくされたが、収集された写本類は戦後、憲政資料室に引き継がれるとともに、戦後の混乱期の中で散逸の危機にあった原史料も、憲政資料室の生みの親である大久保利謙氏の尽力で、憲政資料室の所管するところとなった。以後憲政資料室では、幕末明治期の史料に限らず、大正、昭和前期



ているが、電子展示会は、限られた画面の中で、机上の操作により、展示の流れを追っていくこととなる。したがって電子展示会の中では、全体のどの「位置」にいるかを常に認識できることがサイトの構成上、重要となる。本展示会でも画面遷移、画面上のボタンの位置、フレームの構成、背景の色合い等々、コンテンツ作成を担当した会社から提案された案をもとに、「見易さ」という観点を第一に画面構成を考えた。また掲載史料の中でも目立つものをピックアップして、「スライドショー」を作製し、見る人に興味を持っていただけるような工夫もこらした。

展示史料本体の画像や解題の他にも、史料の時代背景を表すような写真・画像を各章に掲載することに努めた。この掲載手続き等については、展示会事務局（参考企画課情報サービス第二係）に御苦労をおかけした。また、歴史の裏話を紹介する「コラム」、および一次史料の持つ意味について解説した「歴史史料とは何か」の各コーナーを、当展示会の監修者である佐々木隆先生（聖心女子大学教授、当館客員調査員）に執筆していただいた。さらに「歴史史料はこう使う」（執筆 今津敏晃非常勤調査員）では、ロンドン海軍軍縮条約締結問題という歴史的事例に則して、一次史料の読み解き方を紹介した。以上のようなバラエティーに富んだサイト構成ができあがったのは、当展示会に関わった若い職員の、展示会を見る側の視点に立った柔軟な発想と工夫に拠るところが大きい。

一方、英文版は、ジョージ・アキタ先生（ハワイ大学名誉教授）に監修していただいた。アキタ先生は、憲政資料室の古くからの常連の利用者であり、草書体で書かれた史料の解説という困難な作業を、言語の壁を克服して続けてこられた、日本近代史の碩学である。今回、幕末から戦後まで100年にわたる歴史史料という大きなテーマからしても、英文の監修については、過去の電子展示会に比して予想を超えた労力を要した。しかし、「憲政資料室への恩返し」というアキタ先生の意気込みにより、何度にもわたる対訳作業の末、しっかりと英文のコンテンツが仕上がった。この場を借りてあらためて感謝を申上げる。

最後に、このような貴重な史料をまとめて、広くネットの世界で公開することができるようになるまでには、前述したような史料収集に尽力され、史料にこだわりを持ち続けた館内外の関係者の足跡があることを再度記しておきたい。このような先人の残した蓄積が、現代の技術環境の進展により、今新たな広がりを見せ花開いたのではないだろうか。

（政治史料課 堀内寛雄）